

朝井リヨウ『何者』論

— 幻想と編集のゆくえ —

中原美紀

はじめに

朝井リヨウ「何者」は二〇一二年一月に新潮社より書き下ろして発刊された長編小説である。第一四八回直木三十五賞を受賞し、映画化もされた本作は、朝井リヨウの代表作の一つに数えられる。発表当時、榎本正樹は本作の書評において、次のように述べている。

物語の結末近く、仲間が次々と内定を決める中で面接に落ち続ける一人が、「痛くて、カッコ悪い姿であがき続ける」ことの意味を説く場面は、強く深く心に刺さってくる。諦念を帯びた「何者かになんてなれない」という自己認識からの出発こそ、人生の可能性もまた広がらう。その意味において『何者』は、この時代の「希望」の根拠を逆説的に明らかにする。¹⁾

就職活動（以下、就活）での挫折を経て得た「何者かになんてなれない」という自覚が前途を照らし、そこに希望を見

出せると榎本は評する。この榎本の評価に沿うように、レビューサイトにおいても、「もうきつと大丈夫だよ!」「拓人が前へ進む一步を踏み出すことができてよかったです。」²⁾と、「希望」をラストシーンに読み取る読解がなされていると確認できる。拓人とは、本作の主人公であり語り手だが、結局拓人は内定への手応えを得られずに物語は結末を迎える。それにも関わらず読者が拓人を「もう大丈夫」と希望ある眼差しで見送れるのには、拓人の語りが関係しているだろう。また、拓人の視点で語られる作中において、他の登場人物の描写にも、拓人の主観が入ると推察される。本稿では、拓人の語りに関する考察を中心に、二〇一六年十月に公開された三浦大輔監督の映画「何者」や、朝井リョウによる短編集『何様』³⁾との比較も踏まえ、拓人の語りを離れた人物像をとらえる。そのことによって結末の読み替えを行い、従来の読解がなされる一因が社会状況にあったことを明らかにしたい。

—

拓人の語りを分析するにあたって、まずは登場人物を確認しておきたい。本文中の登場人物紹介は「Profile」のプロフィール欄を模した形式で展開され、SNS上における彼らの自意識の表出を一目で見られる形で読者に全員の第一印象を植え付ける。また、拓人の語りによる人物描写も、概ねこのプロフィール欄の傾向に一致してくる。これにより物語中盤までは、光太郎はノリと要領がいい人物、瑞月と拓人は落ち着いている人物、理香は「意識高い系」、ギンジと隆良はクリエイター気取りとして読者に提示されていく。しかし、物語結末部において、ギンジと隆良は就活をしておらず、瑞月と光太郎が内定を獲得、それに対して理香と拓人が内定を獲得していないという状況になる。ここで、ギンジは、劇団の座長として、小さいながらも実績を重ねているため、生きていく場所が決まっているという意味で、内定を獲得している組に振り分けることが可能である。したがって、物語結末部で内定を獲得していないのは、理香と拓人と就活をしていない隆良といえ

るだろう。さらに、内定が出ないばかりか、拓人が就活二年目であったということも拓人は隠しつつ語っている。それが終盤になって初めて、拓人以外の人物の発話によって明かされる。こうしたところに、拓人による語りの編集・統制が見てとれるのではないか。

この編集が最も効果的になされていると考えられるのが、隆良による就活批判に瑞月が反論する場面だ。隆良は就職に對して否定的で、就活をしていない。ギンジの演劇と合同での企画を企画していたのだが、ギンジと考えが合わず、企画が白紙になったと語る隆良は、「会社って、考え方が合うわけでもない人たちと同じ方を向いて仕事しなくちゃいけないんだろ?」と、就活批判を展開した。隆良の態度に對し、瑞月は次のように啖呵を切る。

「生きていくことって、きつと、自分の線路と一緒に見てくれる人数が変わっていくことだと思うの」

(中略)

「今までは一緒に暮らす家族がいて、同じ学校に進む友達がいて、学校には先生がいて。常に、自分以外に、自分の人生と一緒に考えてくれる人がいた。学校を卒業するって言っても、家族や先生がその先の進路と一緒に考えてくれた。いつだって、自分と全く同じ高さ、角度で、この先の人生の線路を見てくれる人がいたよね」

(中略)

各駅停車の電車の中で、瑞月さんと、隣同士で座った。あの帰り道のことが、思い出される。

「だから今までは、結果よりも過程が大事とか、そういうことを言われてきたんだと思う。それは、ずっと自分の線路を見てくれる人がすぐそばにいたから。そりゃあ大人は、結果は残念だったけど過程がよかったからそれでいいんだよって、子どもに對して言ってあげたくなるよね。ずっとその過程と一緒に見てきたんだから。だけど」

瑞月さんは言った。

「もうね、そう言ってくれる人はいないんだよ」

——私ね、ちゃんと就職しないとダメなんだ。

「私たちはもう、たったひとり、自分だけで、自分の人生を見つめなきゃいけない。一緒に線路の先を見えてくれる人もう、いなくなっただよ。進路を考えてくれる学校の先生だっていないし、私たちはもう、私たちを産んでくれたときの両親に近い年齢になってる。もう、育ててもらうなんていう考え方ではいられない」

——私のお母さん、ちよつと弱いんだよね。体っていうよりも、心が。

「私たちはもう、そういう場所まで来た」

電車の中で聞いた瑞月さんの声が、現実のそれと交差する。

(中略)

「したこともなくせに、自分に会社勤めは合ってる、なんて、自分を何だと思ってるの？ 会社勤めをしている世の中の人々全員よりも、自分のほうが感覚が鋭くて、繊細で、感受性が豊かで、こんな現代では生きていき辛いなんて、どうせそんなふうに思ってるんでしょ？」

隆良はその場から動かない。

「そんな言い方ひとつで自分を守ったって、そんなあなたのことをあなたと同じように見てる人なんてもういないんだよ。あなたが歩んでいる過程なんて誰も理解してくれないし、重んじてない、誰も追っていないんだよ、もう」

瑞月さんの言葉から滲み出る説得力が、この部屋にいる全員を、がんじがらめに行っている。

この場面で拓人は、瑞月の台詞の合間に「——私ね、ちゃんと就職しないとダメなんだ。」——私のお母さん、ちょっと弱いんだよね。体っていうよりも、心が。」と挿入し、以前に「各駅停車の電車」で瑞月から拓人に語られた瑞月の家庭事情についての台詞を想起している。瑞月の長台詞の後には、「瑞月さんの言葉から滲み出る説得力が、この部屋にいる全員を、がんばりがらめに行っている。」と、全員が説得力を感じていることが示されている。ただし、ここで留意すべきは、この時点で瑞月の家庭事情を知っていたのが、光太郎と拓人のみである点だ。瑞月が母親を連想しながらこれらの台詞を発話したことは十分考えられるのだが、瑞月の母親のことについて隆良と理香は当然知らない。なお、映画版においては、この台詞の大人と子どもに関する部分は全て省略されている。むしろ、省略の結果、要点が絞られた映画版の台詞のほうが、言葉の強度が増しているともいえる。隆良に伝えるべき要点は、瑞月の母親が思い出される部分以外にあり、理香と隆良が感じたであろう「説得力」には、瑞月の来歴は関わっていない。しかし、ここで拓人は瑞月の境遇に対する「同情」を、「説得力」の根拠としてとらえ、読者に提示した。

この場面の編集は、拓人が瑞月の隆良への言葉を自分のこととして受け止めていないことも明らかにしている。瑞月から隆良への台詞である「自分のほうが感覚が鋭くて、繊細で、感受性が豊かで、こんな現代では生きていき辛いなんて、どうせそんなふうにいるってんでしょ？」が拓人に受容されておらず、拓人が隆良を下に見ているからこそ、終盤で理香から拓人に浴びせられる「自分の観察と分析はサイコーに鋭いって思ってるもんね。」という台詞が導かれるのだ。

このように、『何者』は、拓人の主観が大いに反映された語りであることが確認できた。しかも、ラストシーンへの展開を意識しつつ語っているともいえる。では、ラストシーンではどのようにして希望ある印象を読者に与えているのだろうか。

たぶん、落ちた。

両膝の上で、ぎゅつと拳を握り締める。

だけど、落ちてても、たぶん、大丈夫だ。不思議と、そう思えた。

『何者』は、拓人が面接を受ける場面で、以上の文章をもって閉じられる。拓人が落ちたと感じるのは面接の手応えのなさが原因だが、本章で問題にしたいのは、ラストシーンにおける拓人の面接の実態である。

拓人が面接を受ける様子が描かれるのは、ラストシーンだけである。したがって、面接で落ち続けているという情報はあれど、実際にどのような面接を行っているのかは、ここまで読者には知らされてこなかった。ここではインターネット通販事業を手掛ける企業の面接を受けているのだが、拓人の面接の拙さが目立つものとなっている。

〈最近インターネット通販で購入したものは何か、購買の動機も併せて答えよ〉という設問に対し、拓人はプリンターを挙げる。しかし、「今までプリンターを貸してくれていた友人と」「仲違いした」ことを吐露しただけで、他の就活生のように、事業内容や面接へのモチベーションと絡めていない。また、〈あなたにとつての【ココロ、ウゴカス】（企業理念）とは何か〉という設問には、「演劇の舞台です」と答えるも、最終的には「演劇というよりも、みんなと一緒に観に行くことができるかもしれないということに、心を動かされているのかもしれないません」と一貫性のない受け答えをし、ここでも体験と企業理念のリンクがみられない。〈短所と長所を一つずつ述べよ〉という設問には、「短所は、カッコ悪いところです」「長所は、自分はカッコ悪いということを、認めることができたところです」とだけ答え、アピールポイントになりそうな

原体験を語りはしない。どれも面接においては類出問題であるはずだが、対策をしていないことがうかがえる。

理香に「カッコ悪い姿のままがあく」ことを説かれた直後の面接において、このように確かに拓人は「カッコ悪く」、拓人自身も面接で「カッコ悪さ」を認めたと言っているところが、「大丈夫だ」「前へ進む一步を踏み出すことができ」たと感じさせる要だろう。しかし、理香のいう「カッコ悪い姿のままがあく」とは、ただありのままの姿をさらけ出すことだっただろうかという疑問が残る。

拓人は物語前半において、就活について次のように述べている。

就活がづらいものだと言われる理由は、ふたつあるように思う。ひとつはもちろん、試験に落ち続けること。単純に、誰かから拒絶される体験を何度も繰り返し返すというのは、づらい。そしてもうひとつは、そんなにたいしたものではない自分を、たいしたもののように話し続けなくてはならないことだ。

つまり、就活のルールとして、自分を良く見せることは、拓人にとっても当然のことなのだ。「カッコ悪い姿のままがあく」とは、やはり理香が実践していたように、恥やプライドを捨てて自己研磨に励み、自分の持てる武器の精度を可能な限り高めて提示することであり、何も準備せず面接に臨むことではない。

ちなみに、映画版では「あなた自身を一分間で表現せよ」という設問に対し、長い沈黙の後、「すみません、一分では話されません」と返答する。作中、短い言葉で自己表現することを強いられる現代では、言葉の取捨選択の中で、捨てられたほうに人の本質があるのではないかという問題が提出される。この問いに対する答えとしての「話されません」も一側面としてあると考えられるが、面接における返答としては違和感がある。

このような拓人の面接態度の不適切さの所以は、拓人の自意識に求めることができる。就活のつらさの一因を自分を良

く見せることだと認識し、「就活一年目で盛り上がる君たちを俯瞰する観察者の俺、って感じ」を「すぐく出して」いた人が、普段から面接における類出問題の対策をしていなかったとは考えにくい。また、グループディスカッションについては、「発言は少なめなんだけど、最後にちゃんとまとめたりしてて、すごいなって思った。地頭いいんだらうなって」と理香に評価されており、人前で話せないわけでも空気を読めないわけでもないことが分かる。しかしこれは理香の発話から推察されるものであり、拓人は自分の就活現場での直接的な振る舞いを語りから排除してきた。突如ラストシーンでなされる面接での異常な様子の提示には、拓人の自己アピールを見ることができらるだろう。つまり、理香の厳しい指摘を受けてもなお、「どっかで『君は他の子と違って面白い考え方をしてるね』なんて評価されることを期待して」いる、甘い幻想と現実的ではない自意識が拓人の中には存在しているのだ。

三

前章では、拓人の就活の妨げになっていた自意識が物語結末部においても顕れていることを確認した。以上をふまえて本章では、拓人以外の人物像を再考察していく。これに際しヒントとなるのが、朝井リョウ『何様』である。『何様』は、二〇一六年に新潮社から刊行された短編集である。拓人が登場せず、表題作「何様」においては、『何者』のラストシーンの面接で拓人と同席していた男性が就職した企業で奮闘する様子が描かれる。また、『何者』内で主に登場した人物については、ギンジを除き、『何者』の現在より以前の物語が展開されている。拓人の語りを離れ、そして、『何者』時点から遡り、他の登場人物のバックボーンを知ることができらるため、『何様』を参照する。

光太郎が主人公の「水曜日の南階段はきれい」は、『何様』以前に二〇一二年六月に新潮社『最後の恋 Mens』に収録されている。『何者』発表より先に発表された作品であり、これについて朝井リョウは「光太郎が魅力的な人物だと作者な

がらに思つて、『何者』を書く時、借りてきたんですよ。」と述べている。

「水曜日の南階段はきれい」では、高校生の光太郎が、ミュージシャンになるといふ夢のために御山大学の軽音楽サークルに入ると周囲に宣言し努力する中で、本物の夢とは何か悟る様子が描かれる。勉強を教えてくれた夕子の人知れない努力を知った光太郎は次のように語る。

誰にも言わないで、自分の中で大切に育て上げて、努力を続けた夕子さんの夢だけが、本物だと思つた。

また、自身がミュージシャンになりたいと周囲に宣言し、学内の有名人になつたことについては、

夢に向かつて精いっぱい頑張っている人間だつて、誰かに思ってもらいたかつた。あの人ならミュージシャンになれるかもしれない、そう誰かに思つてもらふことによつて、やわらかい、覚悟のない夢を固めていきたかつた。

と内省している。この部分は、『何者』内の瑞月の「隆良くんは、ズーっと、自分がいまやっていることの過程を、みんなに知ってもらおうとしてるよね。」という台詞とリンクする。また、自分の才能を他人の評価に委ねようとする姿勢は、「どつかで『君は他の子と違つて面白い考え方をしてるね』なんて評価されることを期待して」いる拓人とも重なる。つまり、『何者』時点で隆良や拓人が直面している段階を、光太郎はこの時既に経験していたといえる。以上から、光太郎の就活の成功が、ノリや要領の良さだけでなく、自身が置かれた現実を見たうえで取り組んでいたためであるということが見えてくる。『何者』時点で現実根差した就活が強調されるのは瑞月だが、その瑞月もまた就活に成功している人物である。「むしろくしゃしてやった、と言つてみたかつた」では、瑞月の父親が不倫に走るまでが描かれており、この作品に瑞月は登場し

ないとはいえ、現実主義的な瑞月のあり方の基になった出来事といえるだろう。

「それでは二人組を作ってください」では、理香に近い視点から、隆良と同棲を始めるまでの過程が描かれる。「何者」時点で二人は同棲開始から一か月未満であるため、「それでは二人組を作ってください」は「何者」から見て比較的最近の物語であるとわかる。理香は幼少期から二人組にあぶれてきたが、「それでも、自分から頼み込んで二人組をつくってもらうことはしなかった。いままで、ずっと。」と語り、プライドの高さを見せる。姉の代わりに大学の友人、朋美との同居を希望するが、頼むことをせず、インテリアを朋美の好みに整えるも同居は叶わない。このことについての語りにも理香のプライドと自意識を見ることができる。

あのテーブルを見せれば、あそこにかわいくておしゃれな雑貨を並べさせれば、水色の電気笠を、カラーボックスにもなる便利なスツールを揃えさせれば、朋美は簡単にこの家に住むだろうと思っていた。かわいい動物の箸置きなんて見せれば、その暮らしぶりに尊敬させするんじゃないかと思っていた。

私は、朋美をバカだと思っていた。バカな朋美は、私と二人組をつくってくれるだろうと思っていた。

ここで、見栄を張って報われないという挫折を経験した理香は、家具の組み立てにやって来た隆良に「私と一緒に、住んでくれないかな」と、正面から頼み込む。この場面でも理香は隆良を自分より下とみなしており、「結局私は、自分よりもバカだと思う人としか、一緒にいられない。」と自嘲するが、正面から頼み込むという経験は、理香がプライドを捨てる第一歩となったのではないだろうか。理香の、周りに何と言われようと自分の手札全てを武器にする姿勢の萌芽が見える物語となっている。

『何者』内でも理香は「人の内定先をネットで検索」し、「それがブラック会社だって噂されてるようなどころだったら、

ちよつと、慰められ」るなど、他者を下に見て自己保身を試みているが、一方でその自分を客観視しており、拓人との差異はこの点にあるといえる。

唯一『何者』以降の主要登場人物の様子が描かれるのが、「きみだけの絶対」である。ギンジの甥にあたる高校生の亮博の視点で、脚本・演出担当として活躍する二十六歳のギンジの様子が描かれる。ギンジの活躍は雑誌や全国紙に掲載されており、まずはここに『何者』時点からさらに躍進しているギンジを見ることができるといえる。さらに、亮博は、実生活に追われ、舞台のアフタートークを観覧できなかった彼女、花奈と、アフタートークで観念的なことを主張するギンジとを比較し、「生きづらさを抱えている人に寄り添いたい」「社会の中でこの物語を必要としている人に届けたい」というギンジの発言に疑問を抱く。しかし後日、花奈がギンジの舞台のワンフレーズを「なるほどーって思ったもん、あやし」と受容し、生活に取り入れていたことを知る。ここで想起されるのが、朝井リョウがインタビューで語った、「何者か」の基準である。朝井は次のように述べている。

僕は、「何者か」と言えるかどうかを判断する基準は、本の中で書いた言葉を使うと、「自分とは違う場所を見てる誰かの目線の先に、自分の中のものを置けるかどうか」だと思います。要は、ネットで叩かれるかつてことかもしれない（笑）。たとえば隆良の場合は、そこに興味がある人しか集まらないサイトや、興味がある人しか手に取らないフリーペーパーに文章を書いているわけで、それは「何者か」とは言えない気がします。⁶

「きみだけの絶対」において、本来観劇する余裕のない生活を送る花奈によるギンジの脚本の受容は、「自分とは違う場所を見てる誰かの目線の先に、自分の中のものを置いた一例ではないだろうか。また、朝井の基準に依れば、『何者』時点で掲示板に厳しいコメントを書き込まれていたギンジは、既に「何者か」になれていたともいえる。

以上、『何様』を参照して登場人物の考察を進めてきた。光太郎が現実を直視して就活を行っていたことや、理香が隆良に同棲を申し込む経験がプライドを捨てるきっかけになっていことが分かった。「カッコ悪い姿のまま」あがいたギンジが「何者か」になれていたことも明らかになったといえる。

四

以上の検証を踏まえ、登場人物を捉えなおしていこう。

光太郎は、ノリと要領の良さで就活を制した人物ではなく、高校時代に現実を直視し、一度「ドラマの主人公」を降板したうえで、現実には根差した新たな目標とドラマを見出した人物といえるだろう。

瑞月は一貫して、現実には根を張らざるを得ず、本来実現可能と思われた目標を諦めなければならなかった人物として読むことができた。

理香は他者と比較して自分の立場が上であることを必死に確認しようとする人物から、自己の愚かさや恥ずかしさを直視しながら努力を重ねる人物としての側面が浮き彫りになった。

隆良は自分と近い考えに閉じこもり、現実逃避をしつつ、自分が他者をジャッジするという前提を固持している人物として描かれている。ただし、瑞月の啖呵を受けた後、理香の前で着飾らない様子が描かれる。映画版では拓人に「なんか、俺、散々偉そうなこと言っちゃったけど、本気で就活しようと思つて。」と宣言するシーンが挿入され、前向きな変化が強調されている。映画版の監督・三浦大輔について朝井リョウは「小説なのでどうしても書き言葉っぽい部分もある。しかし、そこも含めて脚本にそのまま活かされているくらい、原作を尊重していただきました。」と述べている。原作に忠実に作られた映画における変更部分は、ストーリーの変更というより、鑑賞者にわかりやすく伝えるための変更と考えてよいだろう。

隆良が現実を受け止め、現実に接近していくという方向性を、映画版はわかりやすく示していると考えられる。

拓人は観察者気取りで就活の様子を俯瞰しながら夢を諦めきれずにいたが、目を背けていた「カッコ悪い自分」を認め、地に足のついた一歩を踏み出す人物として読まれている。しかし、今回の検証を通して、仲間の啓蒙を受けてもおカッコ悪く努力することに舵を切りきれず、個性的な自分に対する幻想を捨てられない人物としての姿が立ち現れてきた。

朝井リヨウは『何者』について、次のように述べている。

現代の就活を書こうというよりは、それまでは自分をうまくごまかしてきた人たちが、初めて自分を自分として認めて生きていかなくはいけなくなつた時に何が起きるのか、ということを書きたかつたんです。その格好の舞台が、就活だっただけ。⁶⁾

作中では、現実を受け止める、現実逃避と自己正当化、現実を認めたくなくて理想を目指してあがくという三パターンの姿が描かれた。『何者』を、就活という特定の事象ではなく、自分を自分として認めて生きていかなくはいけない局面を描いた物語として定義すると、物語結末まで現実逃避・自己正当化をしている人物として分類されるのは拓人だけとなるのだ。

以上から、結末まで「何者か」と「個性的な自分」を結び付けた幻想を捨てられていない拓人の前途は明るいとはいえないと読み替えることが可能である。しかし、先に確認したように、従来はラストシーンに拓人の前途に対する希望を感じる読解がなされてきた。ここには読者が抱く「個性的な自分」への期待が潜んでいるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『何者』における登場人物のあり方と結末について、拓人の語りを中心に本文の分析を映画「何者」、「何様」と絡めながら再検討した。結果、前述のように登場人物の見方に変化を確認できた。また、現実的な眼差しをもって就活した者が内定を獲得していると分かった。ただし、光太郎は「就活は終わったけど、俺、何にもなれた気がしねえ」と発言しており、内定を獲得することが、「何者か」になることではないと示唆されている。作者朝井によれば、「何者か」とは「自分とは違う場所を見て誰かの目線の先に、自分の中のを置けるかどうか」であり、インターネットで批判を受けながらも、カッコ悪い自分のまま、自身の創作を提出し続けたギンジは「何者か」になれている。プライドを捨て、自身の暗い感情とも向き合いながらカッコ悪く努力し続ける理香はこの点でギンジに通じるものがあり、内定を獲得、もしくは「何者か」になれる可能性がある人物だといえる。隆良も瑞月の言葉で変化を見せ、物語開幕時より前向きな方向に進んだと考えられる。しかし、拓人は、瑞月の啖呵を彼女の家庭事情に同情する材料として処理し自分のこととして考えず、理香との対峙の場面では「ちがう」「わかってる」と理香の言葉を否定し続ける。さらに、ラストシーンの面接では対策をせず奇を衒った回答をする。仲間の言葉が届かず、結末まで「何者か」と「個性的な自分」を結び付けた幻想を捨てられていない拓人の前途は、「大丈夫だ。」と明るく語られるが、実際は明るくはいえないといえる。拓人による語りの編集の結果、ラストシーンに拓人の前途に対する希望を感じる読解がなされてしまうのである。

「個性的な自分」への幻想を捨てられなかった拓人だが、現代における「個性」を山田雅彦は「個性とは逸脱として制裁を受けることのない微妙なバランスを保った異端である。」と定義する。そのうえで、「これからの社会で求められるのは単に個性的な人物ではなく個性的な人材なのである。」と論を展開している。「個性的な人材」が求められながら、「個性的」なあり方は社会の容認を要する時代に本作は位置している。社会に容認されない「個性」に対する作者朝井の意識は、

本作から約八年後の二〇二二年三月に刊行された『正欲』⁹⁾に見ることができ、稿を改めて論じたい。

こうした時代状況を共有している以上、拓人の語りの編集だけでなく、読者の側にも、「個性的な自分」であろうとする拓人に対して無意識的に希望を読み取ろうとする姿勢があるのではないだろうか。

朝井は、拓人について次のように述べている。

『何者』は、朝井リョウ＝二宮拓人（主人公）＝読者として読んでほしいと思つて書きました。主人公は就職活動に前のめりになっていく人を少し斜めから、冷静に見ているところがあります。読者には拓人と一緒に「こういうダッセイ人いるよな」と読んでもらった上で、最後に「ダサイのはあなたです！」とひっくり返してやりたかった。¹⁰⁾

つまり、読者と作者は拓人を介してリンクしており、広く大衆の意識を背負い込んだ存在が拓人である。「逸脱」と「異端」とのあわいで、他者との差別化を試みて自己の提示する「個性」が、社会に歓迎されるものであってほしい。「自分とは何か」、はつきりさせたい。「何者か」でありたい。そうした大衆の願いが、拓人の前途を照らそうとしたのだ。

(1) 榎本正樹「書評―朝井リョウ『何者』―新潮社」二〇二二年二月一日閲覧

<https://www.shinchoshaco.jp/wadainohon/333061/shohyo.html>

(2) 『何者』―本のあらすじ・感想・レビュー―読書メーター 二〇二二年二月一日閲覧
<https://bookmeter.com/books/5581016>

(3) 本稿における『何様』収録作品の参照は全て、朝井リョウ『何様』（新潮社、二〇一九・六）に依る。

- (4) 本稿における『何者』本文の参照は全て、朝井リョウ『何者』（新潮社、二〇二二・七）に依る。
- (5) 佐藤多佳子・朝井リョウ「明るい夜に出かけて」／『何様』刊行記念対談 『何者』映画化も 小説の光が照らしたものの『波』五〇巻二一号、二〇一六年一月）
- (6) 古市憲寿・朝井リョウ「就活」という窓から見えるもの」（『新潮45』三三巻、二〇一三年一月）
- (7) 宇都宮徹「朝井リョウさん、就活って「何者」ですか？直木賞作家が描く、就活のリアルと本質」朝井リョウさん、就活って「何者」ですか？―就職四季報プラスワン―東洋経済オンライン―社会をよくする経済ニュース (toyokeizainet) (二〇二二年一月二十九日閲覧)
- (8) 山田雅彦「個性的であることの過酷さが見落とされている―「個性を生かす教育」再考―」（『学校教育研究』一四巻、一九九九年八月）
- (9) 朝井リョウ『正欲』（新潮社、二〇二二・三）
- (10) 朝井リョウ「なぜ僕たちは「就活」におびえるか 特集 大学と人材―「育てる」「求める」の乖離」（『中央公論』一二八巻、二〇二三年二月）

（国文学科四年生）